

Title	人間福祉学科 3 年生の大学生活と意識 (第 2 報) : 4 年間の変化
Author(s)	古谷野, 亘
Citation	聖学院大学論叢, 22(2) : 233-242
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/repos/modules/xoonips/detail.php?item_id=1937
Rights	

聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

〈研究ノート〉

人間福祉学科3年生の大学生活と意識（第2報）

— 4年間の変化 —

古谷野 亘

Campus Life and Attitudes of Third-Year Students in the Department of Human Welfare (II):
Changes during a Four-year Period

Wataru KOYANO

In this paper, changes in campus lives and the attitudes of third-year students in the Department of Human Welfare at Seigakuin University are observed. A total of 210 students responded to questionnaire surveys conducted in January 2005 and 2009. The response rate was 86.9% in 2005 and 89.0% in 2009. Factor and cluster analyses yielded three types of students: Study-oriented, job-oriented, and friendship-oriented. Students classified as study-oriented were likely to attend classes regularly and were well-satisfied with their campus lives; job-oriented were students properly facing up to the question of the moment (i.e., preparation for employment after graduation); and friendship-oriented students, who were likely to constantly whisper and check mobile phone mail in the classroom, were less satisfied with their campus lives. During this four-year period, the number of study-oriented and job-oriented students fell, while the number of friendship-oriented students increased. Among friendship-oriented students, the number of students satisfied with their campus lives increased, though this number was still fewer than that of study-oriented and job-oriented students.

Key words; university students, campus life, typology, Seigakuin University

I. 調査の目的

大学生の質の低下が指摘されるようになって久しい。学力の低下以前に、学業への意欲と適性を欠く「学生」の増加によって、授業中の私語や携帯電話、遅刻・退席等が横行し、授業が成り立た

ない“教室崩壊”さえ生じていると言われている。しかし，“教室崩壊”が広汎に生じているところであっても、すべての学生が“教室崩壊”に寄与しているわけではない。教室にはいくつかのタイプの学生が混在しており、あるタイプの学生が一定割合を超えたときに収拾のつかない事態が生じるのである。

聖学院大学人間福祉学部人間福祉学科の3年生には、2005年1月の時点で、「勉強中心型」「就職志向型」「友人関係志向型」という3つのタイプがあり、その増加が“教室崩壊”に結びつきかねない「友人関係志向型」はおよそ3割であった⁽¹⁾。本調査の目的は、その4年後の2009年1月に同一の方法で調査を行い、4年間の変化を知ることにあった。

Ⅱ. 方法

第1回調査(2004年度)⁽¹⁾は、2005年1月に人間福祉学科の3年次に在籍する全学生を対象として、集合調査法により実施された。3年次の必修科目「専門演習Ⅱ」の時間に担当教員がそれぞれのクラスで調査票を配布し、その場で記入させたのち回収した。第2回調査(2008年度)は2009年1月に、同一の調査票を用い、同一の方法で実施された。第1回調査では、同月の在籍者130人のうち113人が回答し、回収率は86.9%、第2回調査では在籍者109人中97人が回答し、回収率は89.0%であった。

調査票には、回答者の基本属性のほか、現在の生活と意識、満足度に関する質問がもりこまれた。生活と意識に関する質問は25項目(表3参照)にわたり、回答選択肢は「その通り」「まあその通り」「あまりそうではない」「そうではない」の4段階であった。分析に際してはこれを肯定的な回答(「その通り」「まあその通り」)と否定的な回答(「あまりそうではない」「そうではない」)の2値に再コードした。満足度に関する質問項目は「いまの学生生活に満足している」と「人間福祉学科に入ってよかったと思う」の2項目で、回答選択肢はいずれも4段階であったが、分析に際しては肯定的な回答(「満足」「どちらかという満足」)および「そう思う」「まあそう思う」)と否定的な回答(「どちらかという不満」「不満」)および「あまりそう思わない」「まったく思わない」)の2値にそれぞれ再コードした。

回答者の類型化は因子分析とクラスター分析によった。最初に、第1回調査と第2回調査の回答者を合わせ、生活と意識に関する質問項目のうち特徴的な6項目(表1参照)を選んで因子分析を行い、因子得点を算出した。次いで因子得点を用いてクラスター分析を行い、クラスターを析出した。因子の抽出は主成分法、因子軸の回転は直接オブリミン回転、因子得点の算出は回帰法によった。クラスター分析は k 平均法によって行い、最適解を得たときの因子数を k 値とした。

析出したクラスターと他の質問項目とのクロス集計を行って、クラスター別に回答者の特性を把握した後、第1回調査と第2回調査における各クラスターの出現頻度を比較検討した。

Ⅲ. 結 果

(1) クラスタの析出

因子分析では、抽出する因子数を2から4に至るまで試行し、いずれも解を得たが、最適解を得たのは因子数を3にしたときであった。表1は、因子数を3にしたときの回転後因子負荷量と相関係数である。因子パターン行列、因子構造行列とも単純構造をなし、異常な抑圧は認められなかった。累積因子寄与率は66.4%であった。第1因子は質問項目「授業には休まず出席している」と「授業には必ずテキストを持ってくる」にのみ大きな因子負荷をもち、第2因子は「授業中に携帯メールをすることが多い」と「大学に来るのは友人と話すためである」に、第3因子は「就職先の業種を決めている」と「実現したい目標がある」に大きな因子負荷をもった。このことから、第1因子は「勉強志向因子」、第2因子は「友人関係志向因子」、第3因子は「就職志向因子」と命名された。

k 値を3とする k 平均クラスター分析によって得られたクラスターの中心（因子得点の平均値）は表2の通りであった。いずれのクラスターも、1つの因子得点の平均値のみが大きな正の値であった。このことから、「勉強志向因子」の因子得点平均値のみが大きな正の値のクラスターは「勉強中心型」、「就職志向因子」の因子得点平均値のみが正のクラスターは「就職志向型」、「友人関係志向因子」の因子得点平均値のみが正のクラスターは「友人関係重視型」とそれぞれ命名された。

第1回調査と第2回調査の回答者合計210人のうち69人(32.9%)は「勉強中心型」、89人

表1 回転後の因子負荷量と相関係数

	勉強志向因子	友人関係志向因子	就職志向因子	共通性
授業には休まず出席している	.828 (.830)	.019 (-.012)	.026 (.122)	.690
授業には必ずテキストを持ってくる	.806 (.810)	-.015 (-.045)	.033 (.128)	.640
大学に来るのは友人と話すためである	.241 (.205)	0.792 (.786)	-.068 (-.073)	.658
授業中に携帯メールをすることが多い	-.259 (-.278)	.750 (.757)	.063 (.002)	.644
就職先の業種を決めている	-.003 (.093)	.000 (-.034)	.822 (.821)	.674
実現したい目標がある	.042 (.135)	-.001 (-.036)	.796 (.801)	.677
因子寄与	1.467	1.190	1.325	3.982
因子寄与率	.244	.198	.221	.664

注：数値は回転後の因子負荷量。

() 内は回転後の因子との相関係数。

表2 クラスターの中心

	勉強志向因子	友人関係志向因子	就職志向因子
勉強中心型 (69)	0.966	0.261	- 0.336
就職志向型 (89)	- 0.179	- 0.685	0.625
友人関係重視型 (52)	- 0.974	0.826	- 0.624
全体 (210)	0.000	0.000	0.000

注：数値は因子得点の平均値。

() 内はケース数。

(42.4%) は「就職志向型」、52人 (24.8%) は「友人関係重視型」であった。

(2) クラスター別にみた生活と意識

回答者の5割は週に5日以上大学に来ており、9割の回答者には大学に気の合う友人がいた。これらの頻度にクラスターによる差はなかった(表3)。しかし、「友人関係重視型」では授業中に私語をせずにはいられない者(48.1%)が他のクラスターより多く、76.9%が授業中に携帯メールをすることが多いとしていた。ただし、授業中に携帯電話で通話する者は1割であった。

また「友人関係重視型」では、授業中に寝ていることが多い者(46.2%)や授業に遅刻することが多い者(48.1%)、ふだんの授業よりアルバイトの方を優先する者(23.1%)が他のクラスターより多かった。就職のための活動(自己分析、企業研究、会社訪問等)を始めた者(44.2%)は他のクラスターより少ないにもかかわらず、「就職活動」という言葉がイヤになってきた者(75.0%)は他のクラスターより多かった。取得予定の資格がある者(51.9%)は他のクラスターより少なく、「楽勝科目」を選んで履修している者(47.1%)が多かった。しかし、それにもかかわらず、試験前にいつも他人のノートのコピーをとっている者(51.9%)が多かった。

他方「勉強中心型」では、授業に休まず出席している者(97.1%)、授業には必ずテキストを持ってくる者(95.7%)が他のクラスターより多かった。反対に、授業に遅刻することが多い者(17.4%)、試験前にいつも他人のノートのコピーをとっている者(17.6%)は少なかった。

「就職志向型」では92.1%の者が就職先の業種を決めていた。実現したい目標がある者(92.1%)は他のクラスターより多かった。しかし、就職ガイダンスに必ず出席している者(53.9%)と就職のための活動を始めた者(55.1%)は半数程度で、いずれも「勉強中心型」よりやや少なかった。

回答者の72.9%は現在の学生生活に満足しており、82.8%は人間福祉学科に入ってよかったと思っていた。しかし「友人関係重視型」では、現在の学生生活に満足している者(57.7%)、人間福祉学科に入ってよかったと思う者(71.2%)が、他のクラスターより少なかった。

表3 クラスター別にみた生活と意識，満足度（第1回調査・第2回調査の回答者合計）

（%）

	勉強中心型	就職志向型	友人関係重視型	全体	CramerのV
教室ではいつも前の方に座る	37.7	36.0	11.5	30.5	.237
授業には休まず出席している ^{a)}	97.1	53.9	23.1	60.5	.580
授業に遅刻することが多い	17.4	31.8	48.1	31.1	.250
成績はよい方だと思う	40.6	33.0	11.5	30.1	.244
楽勝科目を選んで履修している	28.4	29.5	47.1	33.5	.165
シラバスを調べてから履修している	59.4	58.0	42.3	54.5	.142
授業中に携帯メールをすることが多い ^{a)}	29.0	14.6	76.9	34.8	.524
授業中に私語をせずにはられない	17.6	9.0	48.1	21.5	.383
授業中に寝ていることが多い	33.3	29.2	46.2	34.8	.142
授業には必ずテキストを持ってくる ^{a)}	95.7	50.6	15.4	56.7	.618
授業中でもケータイに出る	7.2	3.4	9.6	6.3	.105
ふだんの授業よりアルバイトの方を優先する	8.7	6.8	23.1	11.5	.211
就職ガイダンスには必ず出席している	66.7	53.9	40.4	54.8	.199
就職のための活動を始めた	59.4	55.1	44.2	53.8	.116
「就職活動」という言葉がイヤになってきた	49.3	52.8	75.0	57.1	.209
新聞（スポーツ新聞を除く）を読んでいる	27.5	31.5	7.7	24.3	.225
実現したい目標がある ^{a)}	58.0	92.1	42.3	68.6	.453
就職先の業種を決めている ^{a)}	56.5	92.1	46.2	69.0	.437
大学の行事には必ず参加している	29.0	28.1	19.2	26.2	.091
クラブ・サークルを休んだことがない	23.9	25.0	11.5	21.2	.139
大学に来るのはクラブ・サークルのためである	7.6	11.5	7.7	9.3	.066
大学に来るのは友人と話すためである ^{a)}	73.9	16.9	69.2	48.6	.545
大学に気の合う友人がいる	98.6	88.8	90.4	92.4	.164
試験勉強を友人と一緒にすることが多い	26.1	20.2	23.1	22.9	.060
試験前にはいつもノートのコピーを取っている	17.6	31.5	51.9	32.1	.276
学期中、週に5日以上大学に来る	59.4	54.5	50.0	55.0	.072
学期中、週に4日以上アルバイトをしている	36.4	44.9	40.4	41.1	.075
学期中、週に1日以上クラブ・サークルの活動に参加する	36.4	31.3	31.4	33.0	.050
取得する予定の資格がある	73.5	69.0	51.9	66.2	.179
社会福祉士・精神保健福祉士	54.4	49.4	21.2	44.0	.270
福祉科教員免許	11.8	8.0	7.7	9.2	.063
司書	7.4	1.1	0.0	2.9	.188
認定心理士	20.6	17.2	26.9	20.8	.095
いまの学生生活に満足している	79.7	76.4	57.7	72.9	.198
人間福祉学科に入ってよかったと思う	91.2	83.1	71.2	82.8	.199

a) 因子分析に用いた変数。

(3) 4年間の変化

第1回調査と第2回調査における各クラスターの出現頻度を比較すると、第1回調査では17.7%のみであった「友人関係重視型」が第2回調査では33.0%とほぼ倍増し、「勉強中心型」と「就職志向型」がそれぞれ7～8ポイント減少していた(表4)。「友人関係重視型」の増加は男性より女性で顕著であったが、男性では「就職志向型」の減少、女性では「勉強中心型」の減少と対応していた。入試の種別でみると、一般入試で入学した者では大きな差がみられなかったが、推薦入試とAO入試等の入試で入学した者では「友人関係重視型」の増加が顕著であった。また、このことを反映して、高校卒業後ただちに入学した現役入学者で「友人関係重視型」の増加が顕著であった。

生活と意識に関する個々の質問項目についてみると、10ポイント以上の増減があった項目は、「『就職活動』という言葉がイヤになってきた」のみが増加で、「授業には休まず出席している」「授業には必ずテキストを持ってくる」「学期中、週に5日以上大学に来る」「学期中、週に4日以上ア

表4 属性別にみた両年度のクラスターの分布

(%)

			勉強中心型	就職志向型	友人関係重視型	計	CramerのV
全体			32.9	42.4	24.8	100.0 (210)	-
2004年度			36.3	46.0	17.7	100.0 (113)	.177
2008年度			28.9	38.1	33.0	100.0 (97)	
性別	女性	2004年度	39.1	43.8	17.2	100.0 (64)	.229
		2008年度	22.9	41.7	35.4	100.0 (48)	
	男性	2004年度	32.7	49.0	18.4	100.0 (49)	.167
		2008年度	34.7	34.7	30.6	100.0 (49)	
入試種別	推薦	2004年度	45.0	37.5	17.5	100.0 (40)	.210
		2008年度	31.1	33.3	35.6	100.0 (45)	
	一般	2004年度	26.7	48.9	24.4	100.0 (45)	.154
		2008年度	37.0	33.3	29.6	100.0 (27)	
	その他	2004年度	37.0	55.6	7.4	100.0 (27)	.353
		2008年度	16.7	50.0	33.3	100.0 (24)	
現浪別	現役	2004年度	38.9	43.2	17.9	100.0 (95)	.200
		2008年度	28.2	36.5	35.3	100.0 (85)	
	現役以外	2004年度	23.5	58.8	17.6	100.0 (17)	.147
		2008年度	36.4	45.5	18.2	100.0 (11)	
志望順位	第一志望	2004年度	41.9	41.9	16.2	100.0 (74)	.215
		2008年度	24.2	45.2	30.6	100.0 (62)	
	第一志望以外	2004年度	25.6	53.8	20.5	100.0 (39)	.289
		2008年度	37.1	25.7	37.1	100.0 (35)	

注：()内はケース数。

アルバイトをしている」は減少していた（表5）。取得予定の資格がある者は9ポイント増加し、特に認定心理士の資格取得を予定する者が大きく増加していた。他方、福祉科教員免許の取得を予定している者は大きく減少していた。

表5 クラスター別にみた生活と意識，満足度

（%）

		勉強中心型	就職志向型	友人関係重視型	計
教室ではいつも前の方に座る	2004年度	36.6	32.7	5.0	29.2
	2008年度	39.3	40.5	15.6	32.0
授業には休まず出席している ^{a)}	2004年度	100.0	53.8	25.0	65.5
	2008年度	92.9	54.1	21.9	54.6
授業に遅刻することが多い	2004年度	17.1	39.2	55.0	33.9
	2008年度	17.9	21.6	43.8	27.8
成績はよい方だと思う	2004年度	43.9	32.7	10.0	32.7
	2008年度	35.7	33.3	12.5	27.1
楽勝科目を選んで履修している	2004年度	25.6	30.8	47.4	31.8
	2008年度	32.1	27.8	46.9	35.4
シラバスを調べてから履修している	2004年度	61.0	54.9	45.0	55.4
	2008年度	57.1	62.2	40.6	53.6
授業中に携帯メールをすることが多い ^{a)}	2004年度	39.0	19.2	90.0	38.9
	2008年度	14.3	8.1	68.8	29.9
授業中に私語をせずにはられない	2004年度	19.5	9.6	40.0	18.6
	2008年度	14.8	8.1	53.1	25.0
授業中に寝ていることが多い	2004年度	31.7	30.8	55.0	35.4
	2008年度	35.7	27.0	40.6	34.0
授業には必ずテキストを持ってくる ^{a)}	2004年度	97.6	50.0	20.0	61.9
	2008年度	92.9	51.4	12.5	50.5
授業中でもケータイに出る	2004年度	12.2	3.9	5.0	7.1
	2008年度	0.0	2.8	12.5	5.2
ふだんの授業よりアルバイトの方を優先する	2004年度	12.2	5.9	25.0	11.6
	2008年度	3.6	8.1	21.9	11.3
就職ガイダンスには必ず出席している	2004年度	63.4	55.8	30.0	54.0
	2008年度	71.4	51.4	46.9	55.7
就職のための活動を始めた	2004年度	56.1	53.8	45.0	53.1
	2008年度	64.3	56.8	43.8	54.6
「就職活動」という言葉がイヤになってきた	2004年度	46.3	48.1	75.0	52.2
	2008年度	53.6	59.5	75.0	62.9
新聞（スポーツ新聞を除く）を読んでいる	2004年度	29.3	34.6	10.0	28.3
	2008年度	25.0	27.0	6.3	19.6

実現したい目標がある ^{a)}	2004年度	63.4	92.3	45.0	73.5
	2008年度	50.0	91.9	40.6	62.9
就職先の業種を決めている ^{a)}	2004年度	53.7	92.3	50.0	70.8
	2008年度	60.7	91.9	43.8	67.0
大学の行事には必ず参加している	2004年度	26.8	28.8	20.0	26.5
	2008年度	32.1	27.0	18.8	25.8
クラブ・サークルを休んだことがない	2004年度	25.6	21.3	15.0	21.7
	2008年度	21.4	29.7	9.4	20.6
大学に来るのはクラブ・サークルのためである	2004年度	7.9	14.0	5.0	10.2
	2008年度	7.1	8.1	9.4	8.2
大学に来るのは友人と話すためである ^{a)}	2004年度	78.0	19.2	70.0	49.6
	2008年度	67.9	13.5	68.8	47.4
大学に気の合う友人がいる	2004年度	97.6	92.3	90.0	93.8
	2008年度	100.0	83.8	90.6	90.7
試験勉強を友人と一緒にすることが多い	2004年度	36.6	17.3	25.0	25.7
	2008年度	10.7	24.3	21.9	19.6
試験前にはいつもノートのコピーを取っている	2004年度	14.6	28.8	55.0	28.3
	2008年度	22.2	35.1	50.0	36.5
学期中、週に5日以上大学に来る	2004年度	78.0	69.2	65.0	71.7
	2008年度	32.1	33.3	40.6	35.4
学期中、週に4日以上アルバイトをしている	2004年度	45.0	44.2	55.0	46.4
	2008年度	23.1	45.9	31.3	34.7
学期中、週に1日以上クラブ・サークルの活動に参加する	2004年度	35.9	38.3	31.6	36.2
	2008年度	37.0	22.2	31.3	29.5
取得する予定の資格がある	2004年度	62.5	68.0	45.0	61.8
	2008年度	89.3	70.3	56.3	71.1
社会福祉士・精神保健福祉士	2004年度	52.5	48.0	25.0	45.5
	2008年度	57.1	51.4	18.8	42.3
福祉科教員免許	2004年度	20.0	14.0	15.0	16.4
	2008年度	0.0	0.0	3.1	1.0
司書	2004年度	12.5	2.0	0.0	5.5
	2008年度	0.0	0.0	0.0	0.0
認定心理士	2004年度	7.5	16.0	10.0	11.8
	2008年度	39.3	18.9	37.5	30.9
いまの学生生活に満足している	2004年度	78.0	71.2	45.0	69.0
	2008年度	82.1	83.8	65.6	77.3
人間福祉学科に入ってよかったと思う	2004年度	90.2	80.8	70.0	82.3
	2008年度	92.6	86.5	71.9	83.3

a) 因子分析に用いた変数。

Ⅳ. 考 察

本調査の回収率は第1回・第2回とも高く、項目欠測率も非常に低かったので、調査結果は兩年度の人間福祉学科3年生の実態を的確に反映しているものと考えられる。因子分析の結果はきわめて明瞭で、明瞭に識別される3つのクラスターが析出された。3つのクラスターの存在は、人間福祉学科3年生のなかに3つのタイプの学生が存在していることを示している。なお、因子とクラスターの名称は前稿⁽¹⁾と同一であるが、第1回調査と第2回調査の回答者を合わせて分析しなおしているため、完全に同一のものではない。

「勉強中心型」の学生は、授業には休まずテキストを持って出席し、教室では進んで前の方に座ることが多い“真面目な”学生である。大学の指導には概して従順にしたがうので、就職ガイダンスに必ず出席している者が多く、特に第2回調査では就職活動を始めている者が他のクラスターより多かった。また、現在の学生生活への満足度も高く、人間福祉学科に入ってよかったと思っている。このタイプの学生が多ければ、“教室崩壊”は起こらず、授業はやりやすいであろう。しかし、3年次の終わりになっても就職先の業種を決めていない者、実現したい目標のない者が比較的多いのも「勉強中心型」の学生である。「勉強中心型」には、大学の指導にしたがって毎日の“学校生活”をおとなく送っているだけの学生が多く含まれているのかもしれない。

このタイプの学生は、第1回調査から第2回調査までの間に減少した。特に女性では激減して、その分が「友人関係志向型」の増加をもたらした。

全体の4割を占める「就職志向型」は、就職先の業種を決めている者、実現したい目標のある者が大多数を占めていることから命名された。しかし、就職のための活動を始めた者や就職ガイダンスに必ず出席している者の割合は「勉強志向型」より低く、その半数は「就職活動」という言葉がイヤになっている。したがって、このタイプの学生がすべて就職活動に特に熱心に取り組んでいる者であると考えるのは適当でない。

第2回調査の実施時期は雇用不安が表面化し、大卒予定者の内定取り消しや“派遣切り”が大きく報道された時期にあたる。就職活動に真剣に取り組む必要が強く意識されて当然の状況にあったわけであるが、就職のための活動を始めた者や就職ガイダンスに必ず出席している者の割合は第1回調査と変わらず、この2つを特徴とする「就職志向型」は減少した。「就職志向型」の減少は、一般に就職や進路をより真剣に考えるはずの一般入試で入学した者、人間福祉学科が第一志望でなかった者、現役以外、男性でより顕著であった。これらの者にとっては、現実の厳しさがより痛切に感じられ、就職活動から目を背けたい気持ちを生じさせていたのかもしれない。

授業中の私語と携帯メール、遅刻・欠席、授業よりアルバイトを優先することなど学生の質の低下として指摘される行動傾向を示しているのは、「友人関係志向型」の学生である。他のタイプの学

生と同様にほぼ毎日大学に来ている者が半数を占めるが、彼（女）らにとって「大学に来るのは友人と話すため」であり、学業ではない。登校日数が多いのは授業への出席を強要されているからであって、その当然の帰結が授業中の私語と携帯メール、居眠りである。現在の学生生活に満足している者は、他のタイプに比べて少ない。このような「友人関係志向型」の学生が増加し、彼（女）らにとって苦痛でしかない授業への出席が強要され続けるならば、彼（女）らの行動は“教室崩壊”を招き、他の学生の勉学を妨げることになるであろう。「友人関係志向型」の学生は、人間福祉学科3年生のなかで未だ多数派にはなっていないが、第1回調査と第2回調査を比較すると顕著な増加を示し、第2回調査（2008年度）では3分の1に達している。

「友人関係志向型」の増加は、一般入試以外で入学した者、受験時に現役高校生であった者、女性で顕著であった。第1回調査の回答者が受験した2002年度入試では、一般入試の合格者（全日程合計）が入学者の43.2%を占めていたが、第2回調査の回答者が受験した2006年度入試では27.7%に減少している。他方、推薦入試合格者の割合は36.4%から46.2%に増加している（『入試データブック』）。一般入試による入学者の減少と、多数を占めることになった推薦入試合格者の質の変化が「友人関係志向型」の増加に寄与している。

現在の学生生活に満足している者は第1回調査より第2回調査で増加し、特に「友人関係志向型」では20ポイントも増加している。満足している者の増加はそれ自体望ましいことではあるが、それが「友人関係志向型」の増加によってもたらされたものであることを考えると、どのように評価すべきかは難しいところである。

本調査が対象としたのは、2004年度と2008年度の3年生のみである。したがって、本調査の結果明らかになった「勉強中心型」「就職志向型」の減少と「友人関係志向型」の増加、そして「友人関係志向型」における満足感の上昇が、長期にわたって継続する趨勢であるかどうかを判断するのは困難である。学生の質の変化について把握するためにはさらに長期の観察が必要である。

付記 調査の実施にご協力いただいた教員各位に御礼申し上げます。なお、使用した調査票は2004年度の選択科目「社会調査法Ⅱ」の実習として作成されたものである。

引用文献

- (1) 古谷野亘：人間福祉学科3年生の大学生活と意識. 聖学院大学論叢, 18(2), 223-230, 2006.